

# JISS

The Japan Institute of  
Scandinavian Studies

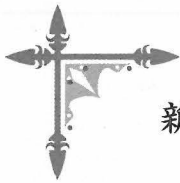
No. 315  
2000/5

発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株)科学新聞社内5階 TEL03(5776)1835/FAX03(5776)1836  
発行人 松元さきり Publisher&Editor Sagiri Matsumoto 編集責任者 川崎一彦 Editor in Chief Kazuhiko Kawasaki  
デザイン ワンハイフンステーション 印刷所 東友印刷 2000年5月25日発行 No. 315



Photo 中嶋千絵 (dill.com)

新理事長挨拶/21世紀のスウェーデン社会研究所の活動の方向についての一考/宮中にお召しの光栄 一両陛下の外国ご訪問を前に/当研究所刊行の図書に寄せる思い/オンプズマンの研究・26年/オスビー、ロンスボダ通信私記 世紀末一栄誉と白夜に乾杯! /留学記 1996~1997/瑞典的日常(3)/Japan Calendar 2000年5月号/Events of Norway ノルウェー通信/2000年度理事会・通常総会報告/MUSIC/MOVIE/BOOK/インフォメーション



## 新理事長挨拶

(社)スウェーデン社会研究所理事長 松前 紀男  
President Prof. Dr. Norio Matsumae

去る3月22日、東海大学校友会館にて行われました理事会・総会に於いて、長らく理事長をつとめて来られた松前達郎氏が職務の都合から御退任されるに伴い、皆様のご推挙により理事長に就任することになりました。

本研究所には、今まで理事として関わりを持っておりましたが、今後は所員並びに御関係の方々の協力を仰ぎ、本研究所を未来に向けて有意義な存在となし得よう努力してゆくつもりです。どうぞよろしく願い申し上げます。

お気付きのことと思いますが、本会報の表紙にある Institute of Scandinavian Studies の名称通り、本研究所の活動も“スウェーデンを基軸としたスカンジナビア諸国並びにその周辺”という意味で、ヨーロッパ北方諸国全体にスポットを当ててゆくことを目指しております。

この4月、デンマークのプレスト市長さんとお会いした時、今年6月にはスウェーデンのマルメとコペンハーゲンの間に橋が架かり将来はフェーマン海峡との間にも橋が架けられ、スウェーデンとデンマーク、そして北ドイツが一体となった新しい地域的活力が生まれるという話を聞きました。これ等の事実によりEUの取り組みを重ね合わせて見ると、この研究所の活動も近年のヨーロッパ北方地域の変貌ぶりを無視することは出来ませんし、我われもそこに、新たな活動の絆を目ざしてゆくことが大切だと思っています。

御存知のように、近年北欧地域の先端的科学技術の歩みは、アメリカと異なるものがあり、各国、各企業が注目するところとなっています。そして人間的側面を重視した科

学技術のあり方に対する追求は、今まで気づかなかった我々に新鮮な視座を与えて来ております。このような事実と方向を見極めながら、皆様方のご期待に幅広くお応えしてゆければ良いが…と考えております。

ところで、本会報の編集責任者であった岡沢憲英氏から、現役で活躍中の方と交代したいとお話もあり、私も岡沢先生のご意見に従い、川崎一彦氏にこの役割をお願いすることに致しました。従ってこのNo.315号の会報から、川崎氏が編集責任者となって発行されており、同氏の考え方を知っていただくために、原稿も依頼致しました。

岡沢憲英先生には、大変長い間ご指導いただいたことに対し感謝申し上げます。

御存知の方も多いと思いますが、川崎氏はJETROのご出身で北欧の企業産業を専門とし、ストックホルム大学環太平洋アジア研究所の研究員を兼任されながら、北海道東海大学の北方圏文化学科の主任教授をつとめておられます。これからは会報の発行のみならず、本研究所の諸々の活動にも、様々な御示唆をしていただけるものと期待しております。

### ◆理事長プロフィール

松前紀男 (Norio Matsumae)

北海道東海大学並びに東海大学学長を経て、現在学校法人東海大学理事。フランス・ストラスブール大学にて社会科学博士を取得。国立総合研究大学院大学の運営審議委員、国立東京水産大学運営諮問委員等、公的機関との関わりも多く、芸術工学会会長、札幌コンサートホールKitara館長等、学術文化団体の責任も担っている。

Thoughts on the directions of JISS's activities towards the 21st century.

## 21世紀のスウェーデン社会研究所の活動の方向についての一考

編集責任者、北海道東海大学北方圏文化学科主任教授 川崎 一彦

Department of Northern Religion Cultural Studies Hokkaido Tokai University Prof. Kazuhiko Kawasaki

### 要 約

これまでの日本におけるスウェーデン社会の研究分野は、少子高齢化、福祉などの経済の「分配面」が突出していた。

しかし、これからの活動の方向としては、経済の「生産面」も含めた研究、また、「国際」から「地域」へと変化する欧州に対応する研究対象の地域的拡大も必要であろう。さらに、これまでの活動は、どちらかというところ、スウェーデンから日本が学ぶ方向が多かった。今後交流を持続させるためには、相互のgive and takeの交流が不可避であろう。21世紀の日本の主要課題を考慮に入れながら、スウェーデン社会研究所の今後の活動の方向をお考え頂きたい。

#### ①経済の分配面(福祉社会政策等)

→生産面(技術、情報、産業等)

#### ②スウェーデン→北欧、北ヨーロッパ全体、 東京中心→全国

#### ③一方的→相互(ギブアンドテイク)

### ◆変わるスウェーデン、北欧のイメージ

北欧、スウェーデンの外国におけるイメージが最近大きく変わってきている。

スウェーデンの外務省は米国のメディアが取り上げるスウェーデンのイメージ調査を行っている。これによれば、かつてはスウェーデンといえば、「ゆりかごから墓場まで」の高福祉と、それを可能にする高い税負担、といったイメージが一般的であった。

しかし、近年は、IT(情報技術)、デザイン、音楽(スウェーデンポップス)などが主流になっている。

昨年米国の主要メディアが取り上げたスウェーデン関係の記事も、インターネットやモバイルビジネス関連のものが多い。たとえば、ビジネスウイークは、スウェーデンのインターネットビジネスの起業家を「E-Vikings」というタイトルで特集して注目された。

今年に入ってから、ニューズウイークが「未来都市ストックホルム」として情報ビジネスに花を咲かせるスウェ

ーデンを大きく取り上げた(2月16日号)。

#### 〈北欧は欧州一のIT先進国〉

米国FORBES誌が99年に実施した、情報インフラの国別ランキング調査では、上位はアメリカ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フィンランド、スイス、オランダ、イギリス、ドイツ、フランス、の順で北欧諸国が欧州のトップに名を連ねている。

ダボスの会議で有名なスイスのWorld Economic Forumの99年の調査による、企業の電子メールの使用率が高い国は、フィンランド、デンマーク、オーストラリア、アメリカ、スウェーデン、アイルランド、シンガポール、カナダ、オーストリア、メキシコで、日本は20位にしかランクされていない。(www.weforum.org)

#### 〈フィンランドは世界一の携帯電話大国〉

携帯電話の普及率が世界で一番高いのは北欧諸国で、中でもフィンランドが65%を超えてトップだ。すなわち、赤ちゃんや老人も含めて、全国民の3人に2人が持っていることになる。

フィンランドの最年少の携帯電話所有者は2歳だそう。何に使うか、と思うと、保育所に預けている間、親が安否の確認や連絡をすることなどに使われている。ほとんどが共稼ぎの北欧では保育所でも親との連絡に携帯が必需品になりつつある。

携帯電話はモバイル・インターネット端末としての機能を高めている。北欧ではインターネットバンキングなど、インターネット端末として機能の利用が一般化している。

ビル・ゲイツがもっとも恐れている人物の一人といわれるLinuxの開発者リーナス・トルバルズもフィンランド人である。

携帯電話端末機のシェアが世界一のノキアはヘルシンキに本社をおくフィンランドの企業である。世界第2位は同じ北欧スウェーデンのエリクソンである。交換設備などシステムについては、エリクソンが世界一のシェアを持つ。

ノキアの株価は高騰しており、昨年末には総発行株式の時価総額は欧州企業の中でトップになった。米国のコココーラやAT&Tをすでに抜いている。

以上の情報技術の例で明らかなように、日本がスウェーデン、北欧から学ぶべきも確実に変わってきている。

研究交流の分野としては、これまでの中心であった経済の分配面である、福祉社会政策のみではなく、生産面(福祉の糧)である、技術、情報、産業、経済にももっと注目すべきであろう。

#### ◆21世紀の日本の主要課題のヒント

上述の情報化をはじめ、21世紀の日本の主要課題としては以下をあげることができるが、北欧諸国はこれらのすべての点について考えるヒントを与えてくれる。

- 1) 少子高齢化
- 2) 国際化
- 3) 情報化
- 4) 価値観の変化(環境問題、男女共同参画など)

#### ◆21世紀のスウェーデン社会研究所の活動の方向性

スウェーデン社会研究所は英文名ではすでに北欧全体をカバーしている。新理事長がご挨拶の中でご指摘になっているように、EUの統合が進む欧州では、「国際」から「域際」の時代に移行している。研究交流対象地域としては、スウェーデンを中心としつつも、北欧州全域に拡大すべきであろう。

また、日本国内でも、「北方圏」交流の発祥地、北海道のように、北欧との交流も盛んな地域も多く、東京以外の地方での事業も拡大する可能性もあろう。

そして、交流が長続きするためには、これまでのように、どちらかというに一方向的に教えてもらうだけではなく、相互のgive and takeの交流が不可欠であろう。

松前紀男新理事長のもとで、21世紀のスウェーデン社会研究所のあり方について、会員の皆様のご意見を伺いながら方向性を探っていく必要がある。

## 宮中にお召しの光栄

### — 両陛下の外国ご訪問を前に —

天皇・皇后両陛下は、平成12年5月20日より、スイス、オランダ、フィンランドおよびスウェーデン四か国をご歴訪なされる。天皇御即位後、両陛下が外国をお訪ねになる旅は、今回で9度目であるが、オランダもスウェーデンも、その公式ご訪問は、今回が初めてとなる。

ご出発を前にして、オランダとスウェーデン両国との交流の歴史や現状について、民間人とお話をなさるお茶会が、5月12日、宮中「連翠」の間において行なわれた。

スウェーデンとの友好団体としては、「日本スウェーデン協会」「日本スウェーデン議員連盟」「スウェーデン社会研究所」「日瑞基金」が列挙され、「スウェーデン社会研究

所」の代表としては、松前紀男会長兼理事長、山田清志常務理事および高須裕三顧問がお召しの光栄に浴した。

定刻午後6時、天皇・皇后両陛下には、侍従長・女官長および侍従を随えてご入室、橋本龍太郎首席随員、鎌倉節宮内庁長官らが待立申上げの中で、中山太郎「日蘭議員連盟会長兼日本スウェーデン議員連盟会長」が参列者一同を代表して、両陛下にご挨拶を申上げた。

ついで、天皇陛下より、一同に対して労をねぎらうお言葉があり、両陛下は右側と左側とに分かれて参集者たちの間を縫うようにして、満遍なくご質問やお聞き及びのため、徐行されたり、停立されたりなされた。

松前紀男会長に対しては、主として当研究所創立当初より会長の席にあった故松前重義博士の人物などについてのお話しかけがなされた御様子。山田常務に対しては、当研究所の諸活動について御質問の模様であった。

高須顧問は、当研究所創立（昭和42年10月）について尽力なされた故大平正芳理事長の北欧諸国への外交的識見について申し上げ、また同年同月23日の開所式には、スウェーデン王室のクリスティーナ王女が臨場され同国政府からの寄贈書籍を大平理事長にお手渡しになったことなど、当研究所歴史の第1頁を簡潔に申し上げた。

両陛下は、昭和60年6月に、皇太子同妃両殿下として北歐四か国を公式にご訪問なので、北歐史についても詳しい知識をおもちである。その際、ツェンペリーの遺品などをウプサラ大学でご見学もされておられるので、それに関連して、1976年5月17日～25日、日本植物学会は在日スウェーデン大使館と共催して「ツェンペリー来日200年記念」の諸行事を行なったことも申し上げた。

皇后陛下には、今回のオランダご訪問に際して同国の元捕虜たちがデモなどの不敬な行為に出るのではないかと

という国民的心配とともに、両陛下のご心身のご無事を心よりお祈りします旨を申し上げた。

そして『道』（天皇陛下御即位十年記念記録集、宮内庁編）にある皇后陛下の御歌（平成十年の部）

英国にて元捕虜の激しき抗議を

受けし折、かつて虜囚の身となりし  
わが国人の上もしきりに思はれて

語らざる悲しみもてる人あらむ母国は青き梅実る頃

この御歌の、なんと高く、なんと深い、皇后様の悲しくも愛しき、ご心境かなと感銘一入でございます、と真情を申し上げた。

ともあれ、働き盛りの頃にはスウェーデン研究に傾倒し、いまは齢80を越した私にとっては「老木に花咲く」思いの美しき一夕であった。

（高須裕三記・Yuzo Takasu）

## On The Publication Of JISS

### 当研究所刊行の図書に寄せる思い

早稲田大学名誉教授・当研究所顧問 中嶋 博  
Emeritus Prof. Waseda University Hiroshi Nakajima

周知のように、当研究所は創立以来「スウェーデン社会研究月報」（当初は所報、現在は会報）を定期的に刊行し、トピック的なものは小冊子としても刊行されてきた。

ところで一方において、当研究所で編集・刊行された図書が、我が国の福祉社会の向上に一役買って来たことが見落とされてはならない。

創立当初から関係をもつ者として、ここに改めて、意義ある一連の図書の刊行がなされていることを紹介したいと思う。年代順にそれを記してみる。(1)『スウェーデン—自由と福祉の国—』（芸林書房・1971年）、(2)『スウェーデンの老人と福祉』（平田富太郎監修・成文堂・1972年）、(3)『福祉とは何をする事か』（至誠堂・1974年）、(4)『福祉社会スウェーデンの新しい動向』（成文堂・1979年）、(5)『スウェーデンの社会政策』（成文堂・1981年）、(6)『Economic Growth Welfare and Industrial Relations: A Comparative Study of Japan and Sweden』（Edited by Björn Thalberg and Naomi Maruo, Japanese Institute for Social Studies on Sweden,1984）、(7)『スウェーデンハンドブック』（早稲田大学出版部・1987年）、(8)『新版スウェーデンハンドブック』（早稲田大学出版部・1992年）。

そしてそのいくつかのものにおいて、編集委員の大役を仰せつかり、高須裕三先生、また故人となられた西村光夫先生、平田富太郎先生、小野寺信・百合子ご夫妻のご指導によって、何とか責任を果たすことを得たのであった。また推薦文等を心よくご執筆いただいた松前重義先生のことを忘れることは出来ない。

なお編集者の立場で、とくに統一を計る必要があり、いわゆる大家・大先輩の方々にも一部書直しを御願ひし、

注や参考文献についても注文をつけるなど、数々の失礼のあったことを改めてお詫びしたい。

ところで、こうした図書の刊行にかかわった最高の思い出は、最初の1971年に刊行したものにまつわる物語である。

それはこの夏渡瑞を前にすべて仕事をし終えたのに一向に刷り上って来ない。当時羽田から国際便が飛び立っていたが、その出発カウンターに、芸林書房社長広岡氏が、やっと刷り上ったと3部持参して呉れてホッとした。

それは、K.F.アルムクヴィスト駐日大使がポルトガル大使にご転任になり、届けに上がる予定をしていたからである。

コペンハーゲン—パリをSASで、そこから国際列車でリスボンに向かったのだが、生憎スペインの大洪水の鉄道事故で、半日遅延、翌早朝着。それから公邸に向かったのだが、本の出来映えをご覧になってのお飲みのご様子に長旅の疲れもふっ飛んだ。

そして極めつきはご夫人自慢作の日本画の大屏風（東山画伯の真弟子）を背景にしての心暖まるご馳走をいただく



スウェーデンのクリスティーナ王女をお迎えして  
「スウェーデン社会研究所」の開所式を挙行



JISS所報第1号

た上、大使からホテル・アンバサダーでゆっくり休むようにとのお言葉。スウェーデン社会研究所に関係させていただいた幸せを、しみじみ感じたことであった。(『月報』第3巻第11号参照)

そしてこれらの刊行物が、我が国の社会の向上に資し、今なおバリア・フリーの社会の実現等のために利用されているのを嬉しく思う。

例えば、『スウェーデンの老人と福祉』は、全国の市町村の殆どの図書館に備え付けられ、政策立案者に利用されているのを知る。

また、これらの一連の図書が、スウェーデンの社会に影響

を与えてきていることも否定出来ない。例えば民間活力利用、私学化、労使関係、在宅介護等に顕著に示されている。

今日、福祉社会、とくにスウェーデンから学ぶものは何も無い、との意見を時々耳にする。

しかし、創立20周年を迎えて、故西村光夫理事長が、「今スウェーデンから学ぶべき点は多く残されている」「20年の歩み・1987年」とされたことを想起したい。

また、国際通の第一人者が、「デンマークやスウェーデンと同じ方向に政策転換することが日本経済を良くする道だし、本当の行政改革だと思う」(『朝日新聞』1998年6月9日付)と断じておられるのは、心強い限りである。

## A research of ombudsman for 26 years

# オンブズマンの研究・26年

潮見憲三郎

Mr. Kenzaburo Shiomi

ストックホルムを初めて訪れたのは1972年6月。国連人間環境会議へのオブザーバーとしての参加が私の任務だった。行き交うクルマは昼間でもヘッドライトを点灯。シートベルトは三点式。信号待ちではエンジンを切る。地下鉄のホームに吐き出される乗客のなかに必ずと言ってよいほど車椅子の人たちが何人も交じっている…。

各国代表のための現場ツアーに仲間入りしてあちこち見て回った。ヘグダーレンスのゴミ処理工場付近はまるで公園。焼却熱で蒸気タービンを回して発電し、それを電力会社に売り、熱湯は地区暖房に、燃えカスは市民スキー場のゲレンデ造成に。ダンデリッド地区病院の待合室はホテルのロビー風。そこに銀行と郵便局と役所の分室があった。

私は、町で言葉を交わした人たちに「オンブズマン」のことを尋ねてみた。「知ってるヨ」と弾むような答え、自分たちの味方なのだという説明、信頼感を表わす目の輝き。その印象が、それから今日に至る私のオンブズマン制度研究の原点となる。

私はたまたま60年代の半ばHarvard Business Review誌のなかの論文でこの制度の応用型のことを知ったが、当時のわが国ではこの制度はまだほとんど知られていなかった。勤務先の図書館で見つけたコロンビア大学のWalter Gellhorn著Ombudsman and Othersとスウェーデン大使館の書架にあった少々の一次資料が、私の頼りの綱だった。

官官接待など行政の不正やマスコミの横暴を、市民の立場で監視するオンブズマン制度。世界に広がるこの制度の原点を探り、日本での糸口を示した画期的で貴重な本である。

自分自身の興味から、私は、自腹をきって、独力でこの制度の研究にハマリ込んだ。大使館のフリッソ報道官には、資料面やオンブズマン事務所への訪問スケジュールの調整などで助けてもらった。1975年7月、訪米からの帰途、数日ストックホルムに立ち寄って国会オンブズマン・ヴェンネグレン判事にインタビュー。1977年6月には、妻にも同行してもらって2週間ストックホルムに滞在し、国会オンブズマンのほか公正取引・消費者・報道各オンブズマンがたや大法官などから懇切なご教示をいただいた(その後、80年の6月と9月、82年、84年、91年にも)。

1979年に「スウェーデンのオンブズマン」(核心評論社)を出版した。同年の4月/9月期、立教大学法学部の3・4年次の学生諸君に、同じテーマで政治学科の講義をする機会があった。その頃、(故)小野寺百合子・(故)松本浩太郎両先生のご推薦をいただいてスウェーデン社会研究所に入会した。まったくの偶然だが、昔むかし、私の一まわり年上の姉と松本浩太郎少年とは、同じ小学校の同じクラスの生徒だった!と。

1976年にはロッキード汚職で田中角栄首相が逮捕されていた。国会でもマスコミでも「オンブズマン」という言葉が目立つようになる。政府筋でも研究を急いだようだ。しかし、例えば行管庁による報告書の類を読むと「民」の論理と「官」の論理のスレ違い状況がよく見える。大平首相の諮問を受けた有識者協議会の提言(1979)の言い回しによれば「わが国の風土に合ったオンブズマン制度の導入についても長期的課題として検討…」と。ここで「わが国の風土に合う」とは、わが国の既存の体制はそのまま、新しい制度はそれに「当たり障りのない範囲内で」という意味だ。「長期的課題」というのは、いま課題として取り上げることはしない、という意味だ。ただ、その後、1981年と1987年に、政府部内に5人程度のオンブズマン職を新設、民間有識者による「行政苦情救済推進会議」を新設、というような構想がブチあげられたが、打ち上がっただけで立ち消えたらしい。

立ち消えたからよかった。そういう「官製」オンブズマンの実体は「行政苦情処理・行政相談・行政に対する信頼の確保のためのもの…」であって、それらは本当のオンブズマンの仕事ではない。オンブズマンは「苦情を処理する役人」ではなく、「役人に苦情を申し立てる市民の代理人」なのだ。

「官製」の発想に見切をつ



潮見憲三郎著 講談社刊

けたかたちで「市民オンブズマン」が登場した。

政治や行政の不正・不当に目を光らせている市民運動グループは各地に数多いが、なかでも1983年以来、大阪「市民オンブズマングループ」が大阪府水道局の「架空接待費」支出（官官接待）に対しておこなった監査請求を皮切りの運動は、1994年7月の「全国市民オンブズマン連絡会議」結成に発展。翌年から全国一斉に地方自治体の食料費・交際費の情報公開請求を開始するなど、継続的、効果的な活動が続いている。

オスビー、ロンスボダ通信私記

## 世紀末—榮譽と白夜に乾杯！

彫刻家、bildkonstnär. スウェーデン国立美術家協会、彫刻家組合会員 中林ヘルグレン富紀子  
Mrs. Fukiko Nakabayashi-Hellgren

新たなミレニアムを迎え青葉薫る候に、古い曆を捲るのはいささか気がひけます。しかも美術の分野は社会を反映する万華鏡の枝葉末節の一現象にしかすぎません。一介の井戸の蛙に対して、故郷を追懐しつつ投稿する機会を与えて下さった事に感謝すると共に、心から光栄に思います。「そっ啄の時機」龍雄飛せん。

私は初心にかえり、より一層精進すべく心に銘肝致しました。

学生運動がたけなわだった1970年前後に、美共闘（多摩美術大学）をその母体として従来ある美術の土壌に風穴を開けるべく、物質の存在と人間の認識の間にあるシステムを超えた、新しい「もの」への発見を提起した、革新の旗手「もの派」の抬頭は、日本の美術史上、一つの画期的な出来事でした。私もその洗礼を受けて美術家として第一歩を踏み出し、この命題をより真摯に模索しながら、4年間東京で活躍した結果、私にとって創作するという事は、自己の存在の根を掘り起し自己完結に至るための鑿そのものでしたので、外国の最新動行に敏感な日本の美術界の生け花、もしくはクローン的な体質とは相入れず、やがて居場所を失ない窒息するに至る事を予見し、見切りを付けざるおえない時機に直面しました。語学力、現実的な受け入れ態勢、将来への青写真も無い、唯、自己の信念、才能を信じて、雑草である私は一粒の種子（素志）を手に、1975年12月厳寒のスウェーデンへ転進し星霜を経て、艱難を克した暖冬の一夜—私は東の間の、そして草の実の栄光を両の手に受ける事が出来たのです。

オスビー市文化賞は16回目を迎え、外国人で、しかも美術家が受賞したのは異例な事で、その先鞭を付けてと同時に、後進への道も開く事が出来ました。

### ◆1998年12月15日北スコーネ新聞

《FUKIKO（富紀子）は受賞した》

ロンスボダ在住の中林富紀子は、月曜日の夜ハスレド学校の講堂において、オスビー市会議の代表者によって、98年度オスビー市文化賞を受与された際に、心から感謝すると共に深く感動した。

賞金はオスビー市会議議長、ダグ・イヴァラソン氏

この市民運動は、オンブズマンの機能の大切な条件のうちの一つを充たしている…監察の対象から独立している、情報公開制度の土台のうえで働いている、市民の味方である（拙著「オンブズマンとは何か」講談社・1996・日本図書館協会選定図書）。

私が20余年の遍歴でたどりついた地点の標識は「オンブズマンは市民の代理人」ということ。私にとっては出発地の標識と同じ、つまり、ストックホルム市民の目の輝きそのものだった。

から10,000クローナ（約15万円）の小切手と表彰状を受与された。

受賞の理由、主旨は次の様に綴られている。

彼女の多方面に渡る文化的活動と異なった素材による多様な表現様式、独特な自然石の彫刻・『Tidensgang』（時空—無限）と、『Tidensspegel』（時空—無限—鏡）、その他に彼女の芸術作品、彫刻的な表現による独創素描、一『生命の線—空間—無限（0.1.2.3.4.5.6.7.8.9...∞）』が国際展で受賞した事をコミュニン（地方自治体）は注目し、高く評価した結果、9名の候補者を振り切って彼女は万場一致で選出された。

中林富紀子は最も人気のある受賞者で、晴れの式場に日本的な優雅な物腰で臨んだが、彼女は、すでに長い年月をこの片田舎で人生と芸術を両立させるべく新たな試練に挑戦していたのだ。

1974年に、かの注目すべきウベボダ国際シンポジウムが開催した際に、彼女は最初にスウェーデンに、そしてロンスボダへ来て、シンポジウムに参加した。後に一時スウェーデンを離れたが、再びロンスボダに戻り留まった。日本に帰国の途中で帰参した動機は、愛情によってか或いは2つの愛情—ひとりの男性とdiabas、ディアバスと呼ばれる黒御影石への愛情のためか。長い厳寒のスウェーデンの冬—彼女は異国でのこの厳しい忍耐と試練の幾歳月を克してその努力が実を結び、名誉ある文化賞を受賞したのだ。彼女は第二の故郷となったスウェーデンにおいては稀な、人間味豊かな暖かい人柄の持ち主である。

中林富紀子は思索的で常に問題意識を持ち、多様な素材を駆使しながら表現様式を編み出しながら追求し多面的に旺盛な芸術活動を展開しているが、それ等を全面的に規定された範囲内に据えるのは不可能である。公共の場に設置された彼女の代表的な作品の筆頭はプレーキン



OSBY

## Fukiko tog emot priset

Det var en mycket röd Fukiko Nakabayashi från Lönsboda som vid måndagskvällens fullmäktigesammanträde i Hasselrödskolans aula tog emot och tackade för årets kulturpris.

Priset som överlämnades av fullmäktiges ordförande Dag Ivarsson och framför allt består av en check på 10 000 kronor får hon - som motiveringen lyder - "För hennes mångsidiga kulturella uttrycksformer i olika material, särskilt sten, som i regel speglar tidens gång. Dessutom för den PR som hennes konst och skulpturer internationellt sett gett kommunen."

Att döma av bifallet i salen var det heller ingen tvekan om att Fukiko Nakabayashi var en

populär pristagare, mycket japansk i utprägnad och uttrycksfatt, men sedan länge adopterad av den bygd där hon slagit sig ner.

Det var 1974, i samband med det uppmärksammade bildhuggarsymposiet i Ubboboda skola, hon första gången kom till Sverige och Lönsboda, och bortsett från kortare avbrott blivit kvar här. Av kärlek, eller två kärlekar till och med - till en man och till den svarta stenen, som kallas diabas.

Det är bara den långa kalla svenska vintern hon har svårt att fördrå och väjja sig vid, avslöjade hon efter att ha mottagit kulturpriset. Mänsklig värme har hon däremot inte behövt sakna i sitt nya hemland.

Fukiko Nakabayashi är en mångsidig konstnär, både i fråga om material och uttrycksformer,

helt omöjlig att placera i något bestämt fack. Offentligt finns hon representerad med konstverk i bland annat den japanska trädgården vid Ronneby Brunn, i Helsingborg, Norrköping, Hassleholm och Kristianstad och naturligtvis i Svarta Bergen utanför Lönsboda, där man kan säga att det hela på sitt började för Fukiko, för snart 25 år sedan.

INGVAR KVARNHAMMAR

Fukiko Nakabayashi, så lycklig så, när hon belönas för sin konst med 1998 års kulturpris.

FOTO: INGVAR KVARNHAMMAR



### Ubbobodagruppen firar konstnärsskap

De konstnärer som fanns i Ubbobodagruppen på fredagen var: Fukiko Nakabayashi, Osby, Metta Jansson, Umeå, Kunoichi Johansson, Umeå, Sven Hjalgren, Fukiko matin, och Sato Susuki, Lönsboda. De har suttit sig framför Fukikos statuer i salen.

Ubbobodagruppern har i år arbetat ihop sedan 1974. I år firar man detta genom att ställa ut konst till Hjalmar Råstorpets ära. I Ubboboda ska det bli en utställning av konstnärerna.

Vilket vid gamla transformatorerna i skolan av vägen. Sedan gåsar och ljus på det avlägsna gamla stenbruket. Skogen munter bort ligger det gamla stenbruket, ibland vattenfylldt och med månglagigt ställer 42 konstnärer ut sina verk, utgående från olika platser under utställningsveckan. På vernissagedagen håller Jörgen Nash från Drakabäck.

ゲ県、ロンネビー市立ブルーン公園内の日本庭園、スコーネ県、ヘルシンボーイ市、ヘッスレホルム市、クリスティアンスタッド市、エストラゴットランド県、ノーショッピング市、勿論、ロンスボダ郊外、黒い鉾山、ヘーグフルトその他である。

これ等総てはFukiko (富紀子) が祖国日本を後にして、ロンスボダに於いて再出発した25年間の成果だと言える。北スコーネ紙オスビー市支局主筆 イングヴァル・クヴァールハンマル (Ingvar Kvarnhammar)

(受賞の動機)の注記

1. クリスティナハム市ベッカ高校で『日本の宗教・文化について』4回、ロンネビー市で『日本の歴史・宗教・文化について』3回講演並びに実演した。
2. ロンネビー市、オスビー市に私の代表的な彫刻が設置されており、他県である両市長、以下が会合して両市の将来を話し合うその橋渡しをした。
3. 97,98年に、ストックホルムで文化使節団による『日本文化のタベ』が開催され、瑞日基金、日本大使館、ストックホルム大学東洋学部 (共に第一回のみ)、ストックホルム日本人会の協力の元に翌日ロンネビー市が招聘し公演は大成功をおさめ、親日都市10年の歴史に輝かしい1ページを加え、更に98年にはオスビー市も招待し、私は公演の際に両市のコーディネーターを務めた。

### ◆ ウベボダ国際シンポジウム25周年記念祝賀

1974年北スコーネ地方で、国際シンポジウムが開催され、日本から7名、スカンジナビア諸国、その他20名参加した。会場は拾石山 (ヘーグフルト)、機械は不備、捨て石以外の素材と食費は自己負担、宿舎は偶然にも同年ノーベル文学賞を受賞された、Harry Martinssonも学ばれた旧学校、関係機関の後援は皆無と、最悪の条件の中で各自が窮境を逆手に取り、会心の大作を制作した。戦友の内3名は在住し、N氏は著名な彫刻家に、S氏は石工場の職人&彫刻家に、私は初志貫徹し今此処で往日をひもといている。

1999年6月10日、晴天に恵まれ100名余りの関係者、観客が集い、オスビー市長、来賓の挨拶の後、スウェーデン、日本、ヨーロッパ数カ国42名の作家による展覧会 (後援: オスビー市) が盛況の内に開幕し、私は数トンに及ぶ99個の自然石の彫刻インスタレーションと素描を出品し、好評を博した。その夜祝宴が催され満座を前にして、私は挨拶した。

「シンポジウムの後私達はルンドでグループ展をやり、オープニングで『若者達』という日本の歌を歌いました。あの日から我々は25歳年を取りましたが、胸に希望を絶やさず青春の日の炎を燃やし生きる限り、我々は永遠の若者です。今私はこの歌を私自身に、会場の皆様に、そして未来に捧げます。50年祝賀で又再会しましょう!」

ふと瞑目すると、この歌詞が時空を超えて私の心の履歴を返照する。君の行く道は果てしなく遠い。だのになぜ、何を求めて君は行くのか、そんなにしてまで。世阿弥は『初心忘れるべからず、命は終わりあり、能には果てあるべからず』と記している。芸術という果てあるべからず道を選んだ私は、帰国の途中で立寄ったポーランド・ルブリンのナチ収容所跡—今世紀最大の歴史の汚点の現場に震撼し立ちすくんだ時、即・今・此処—私は人生の分岐点、地雷の上に立ったのを悟った。運命の磁気が命じるままに、留まろう! 切符をキャンセルしてスウェーデンに、振り出しに戻ったのだ。

君のあの人は今はもう居ない。だのになぜ何を探して君は行くのか、あてもないのに。「親の欲目かも知れないけれど、私も又貴女には日本は狭過ぎると思います。家の事は心配しないで1年でも2年でもそちらで頑張らなさい。」、母は女のくせにと言われた時代に医者になり、父と離婚し、都庁の病院、夜間は自宅開業しながら2人の子供を育て、その間に博士号も取った。自らの力で人生を開拓したからこそ、私を信じ、その決意を理解して見事なはなむけの言葉でもって、異国での再出発を激励して下さったのだ。心底から私達の結婚を喜び、夫を息子の様に愛した最愛の母が逝ってはや六年—もう居ない。慕わしい笑顔が胸一杯に浮かんでくる。

君の行く道は希望へと続く、空に又陽が昇る時若者は又歩き始める。

完走しよう! 『芸術』という鬼の面をも合わせ持つ未熟な妻と二人三脚を組み愛し支え辛抱強く見守るスヴェーネーそして無数の人達に生かされてきた私。溢れる感謝の気持ちをこめて生命への讃歌を歌い終わった。「フキコありがとう!」万雷の拍手の中を縫って頬を紅潮させた『若者達』が、市の関係者が駆け寄り、感極まった様に頬にキスし抱擁しあう—そして夫と。嬉しかった! 我々は今世紀最後の白夜の一刻、万感の想いを込めて乾杯、杯を飲み干したのだ!

## 留学記 1996~1997

スウェーデン社会研究所会員 西村 剛也  
Mr. Takaya Nishimura

スモーランド南部にあるヴェクショー空港に到着したのは1996年8月30日。澄み渡る青空に、少し涼しさを得た風が爽やかに吹き抜ける日であった。空港に降り立った私はその空気を大きく吸ってみた。もう今から4年前のこととなるが、これが高緯度の国の晩夏の天候か、と空を見上げ実感したことを記憶している。海外渡航など一般化して久しいものの、スウェーデンについては矢張り、ある感慨があった。

元々、ラーゲルレーフの「ニルス不思議な旅」やリンドグレンの「ピッピ」シリーズ等々、北欧、就中スウェーデン児童文学に興味を持っていたこともあって、スウェーデン留学は、大学在学中の目標の一つであった。日本の大学に於て1年半スウェーデン語を勉強し、その間もこの言語への興味は増していった。そして1年間の交換留学生としてヴェクショーに来たのである。

僭越乍らここで簡単に紹介させて頂くと、ヴェクショーはスウェーデン南東部スモーランド地方内陸部に位置する人口約7万人、スウェーデンでは中規模の町であり、日本でもコスタ、ボーダ、オッレフォシュのような町と共に「ガラスの王国」として知られる。森林や湖、豊富で美しい自然環境に恵まれたこの町はしれでいて、中心市街部には劇場、博物館、コンサートホール等を備えて現代的でもある。その様な町の市街部の南に位置するテレボルグ地区にヴェクショー大学はある。学生数は総計7500名(但し、この数は当時のもので、現在は増加しているということですので)、経営経済学部、社会科学部、コンピューター科学学部、工学部、人文科学部そして教育学部がある。また、この大学では交換留学生も積極的に受け入れているようでスカンジナビア、ヨーロッパ、北米、日本やアフリカから毎年300名以上が来ており、こうした留学生を対象としたスウェーデン語コースも別に開講されている。なだらかな丘状のあるキャンパスは建物の配置もゆったりとしており落ち着いた雰囲気、最新設備の整った図書館や赤茶色の外壁の本館等が周囲の自然の景色とよく調和して見える。大学を取り巻く環境も良く、大学の北西隣には古城や湖が、そしてその周囲には豊かな森林が広がり、そうした環境の中で休日には散歩、ジョギングやサイクリングを楽しんだり、さらに一年を通じて余暇活動やスポーツも盛んな大学のようなのだ。キャンパス内にはまた学生用のアパートや寮も立ち並び、そこに居住する多くの学生にとっても住み易い環境のようであった。

9月初旬より秋学期が始まり、12月中旬まで続く。留学生対象のこのコースで、スウェーデン語の入門から基礎を学ぶ。日本で一応基本的な会話力と背景の文化に関する知識は学んできたつもりであったが、コース中に初めて知ることも多かった。毎回の授業は1クラス20人位で、教師を取り囲むようにして学生がテーブルを並べる。学生の国籍はヨーロッパ、アメリカを中心に様々。ゆったりとしたスピードで進む授業は学生と教師のふれあいの中で和気あいあいと、しかし語学習得への4要素は確実に教えられてゆ



くといった具合。ここで感心したことは自然さである。教師への質問がし易く寧ろ、会話から自然に発展するような雰囲気であること。加えて、重要な学習事項も又、自然に身に付くように思えたのには、視聴覚教材の多用や、教師と学生間、或いは学生間の頻繁な会話による練習が貢献しているのではないかと考える。

一方、授業以外の面でも学んだことはある。まず、滞在先でのことが挙げられよう。1年間の留学中、前半分はホームステイで、後半分は学生寮で過ごす予定となっていた。そこで秋学期はホームステイのわけだが、スウェーデン人の家庭への参加を通じて、彼等の持つ家族観、人生観、そして自然観を垣間見ることが出来たうえで、母国とのそうした文化の違いを比較するのはなかなか興味深い。日常生活は勿論、多くの年中行事を共に過ごし、体験させて頂いた事や、素晴らしいスモーランドの自然の中、キノコ採り、バーベキュー、冬季にはクリスマスツリーを取りに行ったりと有意義に過ごさせて頂いた。

さらに、大学生活に於ても多彩なイベントが大学側から留学生のために提案され、学業との両立を図りつつ、自分なりに友人との楽しい思い出を多く作る事が出来た。

さて、年が明けて1997年の春学期は1月下旬から始めて、5月いっぱいまでとなる。留学生はここで、英語の若しくはスウェーデン語のコースを選択する。後者を選んだ私は、「Scandinavian Culture」という名の、即ち中級レベルのスウェーデン語を用いての授業をとることとなった。このコースは、約5週間をその一区切りとして、さらに4科目に分かれる。もっとも、「コース」と言っても一学期を通じて、学生数は僅かに3~6名を数えるばかりなのだが。これは確かに学び易い環境ではあったが、日本の大学では斯様に小規模の人数による開講は平生余り考えられぬことを鑑みるに、多少贅沢の感もしたのであった。

授業内容の方であるが、第1科目は中級レベルのスウェーデン語で、これは前期の基本的な語学習得を念頭に置いたコースの延長とも言えるものである。文法事項や発音の復習からさらに程度を進展させたり、エッセイ的にまとめた内容の文章を読んでの要約、発表、そして発表を受けての討論も有り。ひとつ特徴的だと感じたのは、授業に於て一つのテーマを完了すると、教師から「次には何をしたいか?」と尋ねられる事だ。そこで普段から学生の方も、



それぞれの語学習得過程に於てどのような部分を課題として見做し焦点を当てていくべきなのかを認識しておく必要が当然有る。この点で、必ずしもカリキュラム通りの授業進行が予想されるものではなく、そこに多分なる柔軟性が加わる形態であった。

授業の進行速度としては、ここまではややゆったりと進んで来たのであったのだが、2月終わりより第2科目である北欧史から率然勉強のペースが上がる。読みこなす書物の量も増え、プレゼンテーションや小論文等、少々本格的になってきたようだ。ここでも矢張り、全てのテーマは勿論自分で決定してゆくこととなる。因みに私は、北欧古代神話、女王クリスティーナ、さらには19~20世紀初頭のアメリカへの移民などに関して調べた。この科目、即ち歴史からは時間の密度が一段と濃くなった感があったと記憶している。第3科目の地域文化学では、スウェーデン社会の各局面に見る彼等の国民性について、そして第4科目の北欧文学ではラーゲルレーフの作品とその生涯についてを各テーマに選んだ私であった。コースを通じて、相次ぐプレゼンテーションへの準備や、論文を書いている間に時間の中を駆け抜けたようで、且つ充実していたのであろう。

生活面では、春学期は大学敷地内に在る寮での生活である。私の居た寮では留学生が他に全くおらず、スウェーデン人学生ばかりの中で暮らした。この環境は彼等学生達の

考え方や文化を理解するという観点から有用であった。そこで有意義に過ごす事が出来たのは、彼等といろいろ積極的に話をしていたからではなかろうか。日常生活に於て取っている何気無い自分の行動にも文化的背景があって、そういった行動を時には説明してみたり、或いは相手の行動、言葉で関心を持ったことは聞いてみたりなど、意思疎通が重要であると再認識した。



こうして様々な方々のお世話とご協力によって実現し、沢山の思い出の詰まった留学も1997年6月に終え、無事帰国。そして数年が経ち今日に至っているのであるが、スウェーデンという国に関心を持ち続けた学生時代からの成果として、学問以外の面では、日本を世界の中の一國、一員として見る事が自然に出来る様になった事や、その対外姿勢について意識したりといった事は少なくない。これからもスウェーデンについて関心を持ってゆければと思う今日此の頃である。

## What a wonderful Swedish life!

### 瑞典的日常 (3)

熊谷 深雪

Ms. Miyuki Kumagai

スウェーデンの人たちは、日々の食事に対する意識(意欲)が弱いように思う。

ある男の子(5才)の一日のメニュー

朝: ヨーグルト+ジャム

昼: 冷凍の魚フライ、パン

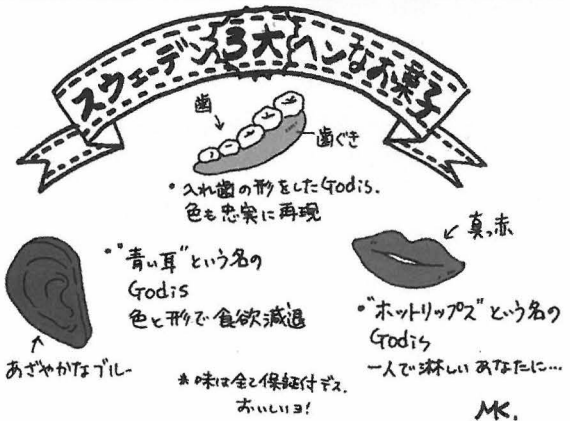
夜: マカロニ、ソーセージ

この子は野菜が嫌いなんだそうで一切口にしない。親も無理に食べさせようとはせず、いつか食べれるようになってくれればいいなぐらいの気持ちでいるらしい。

あと意外なことに彼らは食べものを残す、捨てることにあまり抵抗を感じていないようだ。学校の食事は各自が好きなものを好きなだけ取れるカフェテリア方式なので、自分の胃袋と相談しながら適量を取ればいいものを、まずガーッと皿にもものすごい量の料理をとり、しばらくいじった後、やっぱりお腹一杯、と残してしまう。かくして残飯用のパケツは毎回山のような食べ残して盛り上がるのだった。

私は絶対的に自分のポリシー(ごはんはしっかり、バランス良く食べる。そして残さない)が正しいと信じているが、こちらの人はあんなにも偏食の人が多いのに、皆がこんなにも立派な体格をしてらっしゃる!!

つくづく体のつくりの違いを実感させられるのだった。そんな風に“食事”にはこだわらない彼らが、何でその胃袋を満たしているのかと言えば、それはもう“Godis(ゴードイス)”なのである。Godisは日本でいう駄菓子みたいなも



ので、この国では老若男女問わず皆が大大大大好き。わたしの住んでいるNassjoは、かなり小さな町だが、石を投げりゃGodis屋に当たるというくらい、いくつもお店があり、こんなに同業者が密集していて共倒れにならないものかと心配するくらいである。スーパーマーケットにも、もちろんGodis売場があり、ガソリンスタンドにもあり(24時間買えます!)な、なんと、私の学校の中にもちゃんとある!(学校の回りにはお店もないので、“日々の必要不可欠品であるGodisは校内で売る”という学校側の配慮らしい)

お昼ごはんをたべたその足でGodis売場へかけつける生徒たち。スウェーデン人のパワーの源はGodisだったのだ!!



# Japan Calendar

## MAY 2000

在日スウェーデン大使館 カイ・レイニウス報道参事官

### (5月27日) - 6月4日 「スウェーデンの夏至祭」

新横浜プリンスホテルにて、エントランスホール、アトリウムには高さ10メートルのメイポールが立てられ、スウェーデン風の装飾がほどこされ、スウェーデン製品も展示される。  
詳細Tel: 03-3760-2760

### 4-17日 「スウェーデンのガラス/日本の卵」展

世界的にも有名なスウェーデンのガラスデザイナーUlrica Hydman - Vallienが、卵に絵を描くアートで知られる日本の芸術家、清水恵美子と共に展覧会を開催する。  
詳細Tel: 03-3255-3075

### 6日 「ナショナルデー祝賀会」

スウェーデンの建国記念日を祝して、クムリーン大使夫妻は日本在住のスウェーデン人を対象とした非公式のレセプションを開催する。参加希望の方は大使館広報部まで。  
詳細Tel: 03-5562-5059

### 11日 「ダン・ラウリンのリコーダーリサイタル」

スウェーデン人リコーダー奏者Dan Laurinがリサイタルで、作曲家Jan Jacob Van Eyckの作品を披露する。  
詳細Tel: 03-3226-9999

### 21-25日 「ストリンドベリィ・フェスティバル 糞たれ!!!再演」

昨年9月にストリンドベリィ生誕150周年を記念して開催されたストリンドベリィ・フェスティバルのメインアトラク

ションの一つでもあった「糞たれ!!!」がついに再演される。  
詳細Tel: 03-3324-5700

### <お知らせ>インターネット情報

大使館ホームページ [www.twics.com/~swedemb/](http://www.twics.com/~swedemb/)

スウェーデン外務省 [www.ud.se](http://www.ud.se)

スウェーデン政府関係機関、NGOの情報 [www.VirtualSweden.net](http://www.VirtualSweden.net)

スウェーデンの文化関連のスウェーデン語ニュースレター  
[www.sivi.se/Sviv21.htm](http://www.sivi.se/Sviv21.htm)

## EVENTS OF NORWAY

ノルウェー通信 2000年5月

ノルウェー王国大使館広報部  
(<http://www.norway.or.jp/>)

### Dance

#### ◆ 「ベンゲルフォークダンサーズ来日」

世界各国の民俗音楽・舞踊グループが集う祭典「ワールドフォークロリアーダ」にノルウェーのグループBergen Folk Dancersが参加する。

開会式：7月26日(水) NHKホール

パレード：7月30日(日) 渋谷区内

詳細Tel: 03-3477-1055

### Music

#### ◆ 期待の若手ソプラノ歌手「ブーディル・アーネセン ソプラノリサイタル」

日時：7月4日(火) 開演19時 場所：武蔵野スイングホール

詳細Tel: 0422-54-8822

#### ◆ 北欧音楽を愛するピアニストとメゾソプラノの共演。

「館野泉(P) & 東園己(Ms) ジョイントコンサート」

日時：9月29日(金) 開演時刻未定 場所：札幌キタラホール

詳細Tel: 011-612-8696

### from 事務局

## 「2000年度理事会・通常総会報告」

3月22日(水)、東京・霞ヶ関ビル33階校友会館で、今年の理事会・通常総会が開催され、「1999年度事業報告ならびに収支決算について」、「2000年度事業計画ならびに収支予算について」等が審議され承認されました。

### ■収支計算書 (1999年1月1日～1999年12月31日)

I (収入の部)	単位：円
会費収入	3,353,685
事業収入	3,490,979
その他	3,810,990
小計	10,655,654
前期繰越	5,483,989
収入合計	16,139,643
II (支出の部)	単位：円
管理費	8,100,730
事業費	3,271,046
小計	11,371,776
次期繰越	4,767,867
支出合計	16,139,643
当期収支差額	△716,122

### ■1999年度事業報告

#### ◆ 講演会

・ 1月29日(金) 「スウェーデン見て歩き一省エネ、新エネルギーへのさまざまな取り組みなどを中心に」

講師：平野真佐志氏

・ 2月10日(水) 「スウェーデン紀行一オーロラを求めて」

講師：中山博邦氏

・ 4月23日(金) 「スウェーデン人の国民性について」

講師：田中一郎氏

・ 5月12日(水) 「21世紀社会のモデル探し」

講師：小沢徳太郎氏

(以上の講演会は、スウェーデン交流センターと共催で開催しました。)

・ 11月5日(金) 「アルフレッドノーベルの人となり」

講師：津金レイニウス豊子氏

於：事務局イベントルーム

#### ◆ 会報「JISS」発行

#### ◆ スウェーデン語講習会

・ 1月20日(水)～4月27日(火) 第98回開講

(スウェーデン交流センターと共催で開催しました。)

・9月6日(月)～12月18日(土) 第99回開講

於：事務局イベントルーム

\*3月13日(土) 夏期スウェーデン短期語学留学ガイダンス開催

◆その他

・3月10日(水) 臨時理事会開催。

於：スウェーデンセンタービル6階会議室

・3月10日(水)～3月13日(土) 在庫書籍、CD販売。

・5月15日(土) 港区浜松町科学新聞社内5階へ事務所移転。

・8月28日(土) 「やかまし村の子供たち」ビデオ上映会。

於：事務局イベントルーム

・9月6日(月)～9月27日(月) 「スウェーデンのながいさんぼ

道」写真展。於：事務局イベントルーム

・9月24日(金) 理事会・通常総会開催。

於：霞ヶ関ビル33階校友会館

・12月2日(木)～12月28日(火) 在庫書籍販売。

於：事務局内

■2000年度事業計画

◆継続事業

・各北欧諸国大使館または関係団体と協力して、講演会・研究会を随時開催。

・会報「JISS」を年6回発行し、会員および関係団体に配布する。

・ホームページの内容の充実を計る。

・スウェーデン語講習会を年3回開講。

・スウェーデン語学留学に関する資料提供または簡単なガイダンスを行う。

・スウェーデン全般の資料や書籍を収集・整備し随時閲覧可能な状態にする。

◆新規事業

・スウェーデンまたは北欧全般の音楽、映画、スポーツなどの分野の情報を積極的に収集し案内する。

・会員に対して会員証を送付し会員管理の正確な整備をする。

・北欧関係の書籍リストを整備し販売する。

・スウェーデンの各分野に関する専門的な問い合わせが増加しているため、それに対応できるネットワークを充実させる。

・新会員の増強に努める。

# スウェディッシュ・ポップ・ミュージック紹介

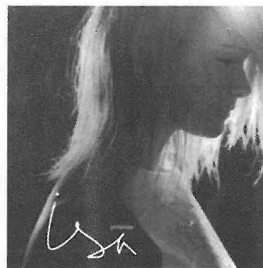
## ISA/SOLVEIG

### ポストMEJA、スウェーデンの新星ISAデビュー!

ストックホルムの街でも、MEJAが世界的規模で有名になったことは自慢話に取り上げられるほど。そんなMEJAの次に行く新星ISA(イーサ)が、日本でもこの4月にデビュー&アルバムをリリース。

1978年生まれの21歳。その甘い風貌とは裏らに、低く落ち着いたハスキー・ヴォイスのISA。父親がスウェーデンで人気のポップ・グループ“Sven-ingvars”のキーボード・プレイヤーという環境で育ったISAは「いつも家にはマーヴィン・ゲイやEW&Fなどのソウル・ミュージックが流れていて、パパがピアノを弾いてくれることもあった」という、まさに羨ましいかぎりのバックグラウンド。スティビー・ワンダーやホイットニー・ヒューストンが大好きなISAは、18歳でスウェーデンの音楽学校“Fridhem(フリードヘム)”に入学。授業ではブラック・ミュージックに没頭する一方、放課後にはライブ・パフォーマーとしての活動に飛び回り、週末ごとにライブ・ハウスを沸かせたこともあれば、Robyn

のバック・シンガーとして参加したこともあった。そんなISAのデビューアルバムは、Jennifer BrownやRobynのプロデューサーとしても名高いUlf LindströmとJohan Ekhéのチームによるもの。さらにソングライターには、ホイットニー・ヒューストンやシャニースを手掛けてきたテロン・ビールを迎え、よりポップでソウルフルな仕上がりになっている。



『Pretender』ESCA8137  
税抜価格 ¥2,000 (発売中)

ファーストシングルとなった「Pretender」(ESCA8138)は、すでにFMでもオンエアされ好調な兆し。なお、現在こちらのアルバムは限定2,000円(税抜)のフラッシュプライスで発売中。このアルバムについての詳しいお問い合わせは、EPICインターナショナル 村上まで。(Tel.03-3475-7281、ホームページアドレス <http://www.sonymusic.co.jp>)

### SOLVEIGの新作、日本先行発売決定!

シングル「マリー」でデビューしたデンマークのアーティスト、SOLVEIG(ソルヴァイ)。10万枚を超すビッグヒットとなった1stアルバム「アナログ」から約1年半ぶりのニューアルバム、「ヴァガボンド・スクォー」がこの6月にリリースされます。こちらも前作同様、名プロデューサーTore Johanssonとの息の合った作品。もちろん、Toreのサウンドには欠かせないザ・モーペッツのリンドゴード兄弟のホーンセクションも参加。久々のピュアなタンバリンサウンドが日本に届きます。

SOLVEIGのヴォーカルは前作にも増してソフトな優しさと幸福感に満ち溢れ、聴いているだけで、とってもスイートな気持ちになれる一枚。そして、今回シングルに決定

した曲が「What Love Can Do」(VICP-35048)。こちらはアルバムよりも更に一足早く、5月24日のリリース。なお、これから夏にかけて北欧へ向かう音楽ファンの方も増える時期とは思いますが、このアルバムがヨーロッパの店頭に並ぶのは、まだまだ数カ月以上も先とのこと。なお、このアルバムについての詳しいお問い合わせは、ビクターエンタテインメント 返田まで。(Tel.03-5467-6538、ホームページアドレス <http://www.jvcmusic.co.jp>)



『Vagabond Squaw』VICP-61060  
税抜価格 ¥2,000 (6月7日発売)

# Movie

## ロッタちゃんと赤いじてんしゃ



奈良美智のイメージ・ドローイングとともにロングラン大ヒットとなった「ロッタちゃんをはじめてのおつかい」(恵比寿ガーデンシネマにて、7月7日までの上映)に引き続き、「ロッタちゃんと赤いじてんしゃ」(原題:LOTTA PÅ BRÅKMAKARGATAN)が6月24日より同劇場にて公開されます。前作は冬から春にかけてのお話でしたが、今回は春から夏が舞台。かわいいうロッタちゃんと共に、やわらかな夏の陽ざしにつつまれたスウェーデンの光景も楽しみながらご覧いただけます。公開初日には、ティーンエイジャーにまで成長したロッタちゃん役のグレテ・ハヴネショルドによる舞台挨拶もあり、今回も引き続き託児サービス付きの上映。なお、詳しくはヘラルド・エンタープライズ(Tel.03-3248-1172)担当:野村まで(電話受付時間:月～金曜/午前10時～午後6時)。

## SHOW ME LOVE



本会報No.314でもご紹介した「ショー・ミー・ラヴ」の公開初日が決定致しました。5月27日より、渋谷東急Bunkamuraル・シネマにて上映です。ポップな雰囲気の中にもスウェーデンの家庭や社会における問題へのメッセージも網羅した、奥深い作品です。なお、こちらの詳細は下記のホームページでもご覧いただけます。

(<http://www.kuzui.co.jp/showmelove/>)

## JISS INFORMATION

前号でお知らせ致しました、当研究所特別講演会「ハビリテーリングの先駆者たちから学ぶ!～スウェーデン医療チームの現場から～」6月6日開催は、ご好評につき定員オーバーとなりましたので、締切らせて頂きました。ありがとうございました。

## The Japan Institute of Scandinavian Studies



(社)スウェーデン社会研究所 事務局(松元・Matsumoto)  
〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株)科学新聞社内5F  
C/O Kagakushinbunsha, 1-8-1 Hamamatsucho, Minato-ku, Tokyo105-0013 Japan  
TEL:03-5776-1835 FAX:03-5776-1836 E-mail:jiss99@tkg.att.ne.jp  
URL <http://www.sci-news.co.jp/sweden/>  
月曜日～土曜日(水、日、祭日休) 10:30～17:30 Mon to Sat (Wed, Sun, Holiday close)

# Books



「現代欧州の交通政策と鉄道改革」  
堀雅通著 税務経理協会刊 3,000円+税  
EU統合によりダイナミックな構造変化に直面した欧州の交通政策と鉄道改革をスウェーデンを中心に紹介する。



## 「ひかり(HIKARI)」

日本・北欧文芸誌 1,000円

本誌は日本で北欧文学を、そして北欧諸国で日本文学を広め、その知識の普及に貢献することを目的としている。

詳細:Tel:03-5562-0023 Fax:03-5562-5129  
E-mail:[ewa@hpo.com](mailto:ewa@hpo.com)



## 「シス」エクセレントフィンランド

発行:フィンランド大使館、1月26日発行

発売:紀伊国屋書店¥1,500(税込)

SISUその意味する所フィンランド魂。その全容が明らかになる。

スウェーデン社会研究所  
ホームページ

<http://www.sci-news.co.jp/sweden/>

## 太陽の誘い(Under The Sun)



本会報No.313でもご紹介した「太陽の誘い」の公開が当初の予定より大幅に変更となり、皆様には多大にご迷惑をおかけ致しましたことをお詫び申し上げます。尚、現時点では銀座シネ・ラ・セットにて初夏の公開を予定中とのこと。また、こちらは本年度アカデミー賞外国語映画賞にもノミネートされ、世界的にも絶賛されている作品。いつまでも太陽の沈まない白夜が美しい、真夏のスウェーデンを描いたこの作品は、どこか銀幕時代のスウェーデン映画を彷彿させるイメージも漂います。詳しい上映スケジュール等に関しましては、シネ・ラ・セット(Tel.03-3212-3761)まで直接お問い合わせください。

## ソフィーの世界(Sophie's World)



ヨースタイン・ゴルデルの小説「ソフィーの世界」が映画化され8月にスバル座他全国東宝洋画系でロードショー上映されます。

14歳のソフィー・アムンセンが、文通相手のアルベルト・クノックスを通して西洋哲学の世界を発見するという物語は、世界中で1200万部を超える売上げを記録し、フィクション部門で1995年の世界のベストセラーに輝いた。